

排中律について

目的

この文章では、俺は排中律を提示する。

1章 排中律

目標

この章では、俺は排中律を提示する。

定義

x を主語とする。 a を述語とする。 a は名詞である、または a は形容詞である。このとき、次の文は真である。

$$x \text{ は } a \text{ である、または } x \text{ は } a \text{ でない。} \quad (1.1)$$

俺は(1.1)を排中律と呼ぶ。もし x は a であるが真である、またはもし x は a でないが真であるならば、 x は a である、または x は a でないは真である。感覚的には、「 x は a である。」と「 x は a でない。」のどちらかは真である。だから、排中律は真である。

なお、排中律が成り立たない場合、「 x は a である」と「 x は a でない」の両方が偽である。または、「 x は a である」と「 x は a でない」のどちらか、またはそれらの両方の真偽が未定義である。

具体例

2 は偶数である、または 2 は偶数でない。2 は偶数であるは真である。2 は偶数でないは偽である。2 は偶数である、または 2 は偶数でないは真、または偽であるので、「2 は偶数である、または 2 は偶数でない。」は真である。

定義

二重否定は排中律に関係している。

$$\text{もし } x \text{ は } a \text{ でないが偽であるならば、} x \text{ は } a \text{ である。} \quad (1.2)$$

もし x は a であるが偽であるならば、 x は a でない。これと(1.2)を仮定すると、排中律が成り立つ。または、もし x は a でないが偽であるならば、 x は a であるが真である。もし x は a であるが偽であるならば、 x は a でないが真である。

2章 排中律が成り立たない場合

目標

この章では、俺は排中律が成り立たない例を提示する。

定義

条件は上記と同じである。

もしある主体が x は a であると認識するならば、 x は a であるは真である。 (2.1)

もしある主体が x は a であると認識しないならば、 x は a であるは偽である。 (2.2)

もしある主体が x は a でないと認識するならば、 x は a でないは真である。 (2.3)

もしある主体が x は a でないと認識しないならば、 x は a でないは偽である。 (2.4)

(2.4)は二重否定でない。たとえある主体が x は a でないと認識しないとしても、 x は a あるは真でな

い。また、その時、 x は a でないは導出されない。

もしある主体が x は a であると認識しない、かつもしその主体が x は a でないと認識しないならば、 x は a である、または x は a でないは偽である。 (2.5)

このとき、(2.2)により、 x は a であるは偽である。(2.4)により、 x は a でないは偽である。すると、偽、または偽が生じる。従って、排中律は偽である。なお、俺は自己言及の背理(パラドックス)の(3.2)を使用した。¹

現実例

俺は胎児の中絶について考える。もしその胎児が人間であるならば、その胎児の中絶は殺人行為である。そのとき、もしある主体がその胎児を中絶したならば、その主体は殺人行為に関して罰される。もしその胎児が人間でないならば、その胎児の中絶は殺人行為でない。感覚的には、その胎児は人間であるように見える、かつその胎児は人間でないようにも見える。

上記の定義を使用すると、(2.2)により、もしある主体がその胎児が人間であると認識しないならば、その胎児は人間であるは偽である。(2.4)により、もしある主体がその胎児が人間でないと認識しないならば、その胎児は人間でないは偽である。このとき、その胎児が人間である、またはその胎児が人間でないは偽である。

この場合、ある主体は「俺はその胎児は人間であると認識しない。」と表現する。その主体は「俺はその胎児は人間でないと認識しない。」と表現する。このとき、その胎児が人間である、またはその胎児が人間でないは偽である。

現実例

俺はキャスター・セメンヤ²の具体例を考える。キャスター・セメンヤは性分化疾患である。そのため、彼女?はサピエンスの雄であるように見える。セメンヤが女子競技に参加した後、セメンヤは男子であると疑われた。実際、彼女?は女子的でない。かといって、彼女?は男子的でもない。

上記の定義を使用すると、(2.2)により、もしある主体がセメンヤが雄であると認識しないならば、セメンヤは雄であるは偽である。(2.4)により、もしある主体がセメンヤが雄でないと認識しないならば、セメンヤは雄でないは偽である。このとき、セメンヤが雄である、またはセメンヤが雄でないは偽である。

この場合、ある主体は「俺はセメンヤは雄であると認識しない。」と表現する。その主体は「俺はセメンヤは雄でないと認識しない。」と表現する。このとき、セメンヤが雄である、またはセメンヤが雄でないは偽である。

現実例

民族や人種に関しても、排中律が成立しないように見える。例えば、俺は8分の1をゲルマン民族とする、かつ8分の7を大和民族とする個体うーぼん(oubonnn)³⁴を考える。8分の1がゲルマン民族であるとき、大和民族と漢民族と朝鮮民族の距離はその混血よりも互いに近くなる。この時、その個体は遺伝的にはモンゴロイド人種ですらない。

その一方、8分の7が大和民族であるとき、大和民族の群れに馴染んでいることもまた事実である。このとき、大和民族はその個体をどこか”日本人っぽい”と感じるだろう。また、その父系が大和民族であるとき、その個体はより”日本人っぽい”と感じるだろう。ただ、それでも、鼻筋がコーカサス人種のように通っていると、大和民族はある種の違和感を覚えるはずである。

1自己言及の背理(パラドックス)

2 [キャスター・セメンヤ - Wikipedia](#)

3 <https://twitter.com/oubonnn/>

4 <https://twitter.com/oubonnn/status/1750139494886527171>

上記の定義を使用すると、(2.2)により、もしある主体がうーぼんが日本人であると認識しないならば、うーぼんは日本人であるは偽である。(2.4)により、もしある主体がうーぼんが日本人でないと認識しないならば、うーぼんは日本人でないは偽である。このとき、うーぼんが日本人である、またはうーぼんが日本人でないは偽である。

同様に、この場合、ある主体は「俺はうーぼんは日本人であると認識しない。」と表現する。その主体は「俺はうーぼんは日本人であると認識しない。」と表現する。このとき、うーぼんが日本人である、またはうーぼんが日本人でないは偽である。